

高次機能障害支援室

英国における高次脳機能障害のリハ事情 -神経心理学的リハについて-



2017年3月から1年間、英国のThe Oliver Zangwill Centre (OZC) という施設に滞在し、当地のリハについて学ぶ機会を得ました。この施設は1996年に設立され、後天性脳損傷者（脳外傷者等が構成の中心となっており、日本で言う高次脳機能障害者とかかなり近い言葉です）に対するリハを行っている専門機関です。主に外来患者に対してのリハを臨床心理士、作業療法士、言語聴覚士が中心となって実施している施設で、また論文、刊行物、インターネット情報などの多くの情報発信がなされています。

世界中から高次脳機能障害リハのスター達が気が向くとふらっと遊びに来る、そんなところでもありました。

この滞在での最大の成果は、「神経心理学的リハ」に長期間触れ、その理解を深めることができたことでした。神経心理学的リハとは何か？従来のリハは「一つの症状に対して一つの訓練を行う」というモデルで考えることが多いのですが、脳外傷等は複数の症状が複雑に絡み合うためにこのモデルでは限界があります。そこで欧米では、この約30年の間に、包括的、全人的、多職種間アプローチをキーワードとする新しい神経心理学的リハを発展させてきました。神経心理学的リハは従来のモデルとは全く異なる概念になったと言っても過言ではなく、かつこの進化は現在も進行形で進んでいます。この経緯は日本にも一部紹介がされてきたところではありますが、実際にその実践に触れてみるとまだまだ理解が足りなかったのだということを実感させられました。神経心理学的リハを一言で言うことはなかなか難しく、詳細を述べるには紙面の限界がありますが、このリハを今後日本でも具現化するために、日本のシステムや文化に合うようにアレンジしていく作業が必要であると考えています。また、このリハでは「自分とは何か、どう生きるか」というテーマが大きな命題となります。地域生活や就労など、社会との関わりは切り離して考えることのできない重要な要素であり、神経心理学的リハにおける地域支援のあり方もまた、（世界と共に）議論をしていかなければならないところではあります。

（高次脳機能障害支援室長 青木 重陽）

